安田治樹所長のご退職に際して

秋田貴廣

令和二年三月現在、立正大学法華経文化研究所の所長である安田治樹先生（立正大学仏教学部教授）におかれましては、令和元年九月二七日、めでたく古稀の芳寿を迎えられました。それに伴い、立正大学学園規程に従いまして本年三月末日をもって立正大学を定年退職され、同時に研究所の所長をご退任されます。そこで法華経文化研究所では、運営委員会の総意によって当『法華文化研究』第四六号を安田治樹教授退職記念特集として編集、刊行することを決定致しました。

安田先生ご自身は、学術的研究成果を投稿する場である研究所の紀要を、「退職」を記念する機会と位置付けることについて、関係者に対して失礼なのではないかとの懸念をもっておられました。所長としての懸念は理解できますし、確かに前例のないことです。このような異例の措置を運営委員会で決定する理由の中には、いくつかの事情と想いが交錯しておりますので、その経緯について少しだけ記させていただきます。

仏教学部の教員が定年退職する際、これまでは『古稀記念論文集』を刊行することが半ば慣例となっておりましたが、安田先生はこれを固辞されました。その理由の中には、『論文集』刊行に際して相応の作業を抱えることになる後輩の負担を回避するご配慮があったと思われます。この作業を担うことになる人の数が以

前よりも大幅に減少している状況の中で、先生は後輩に多くの作業を担わせてまで祝ってもらうことに強い抵抗を感じておられました。「むしろ私がお世話になった皆さんに感謝の気持ちを表現して辞めたい」というのが先生の口癖でした。

後輩の側として、先生のご配慮はとてもありがたいことです。しかし一方で、先生に対する私たちの感謝の気持ちを何で表現すればいいのか、大いに悩むところでもありました。やはり何らかの方法で謝意を形にして残したいというのが、法華経文化研究所の運営委員ならびに仏教学科教員全員の偽りない想いでした。そして先生の意図を汲みつつ、かつ感謝の意を「形にして残す」ことができる方法について議論する中で、本年度の『法華文化研究』を記念特集号とすることが提案され、決定し、これを認めていただきたく安田先生にお願いした次第です。このような「形」について違和感をもたれる方もおられるかもしれませんが、できますれば上記の事情をご理解いただき、お許しいただきたくこの場を借りてお願い申し上げる次第です。

さて、安田先生の本学におけるご功績とともに所長としてのご事績について、ささやかな辞とともにここに記して、研究所の歴史として記憶にとどめておきたいと思います。

先生は平成二〇年に立正大学に専任教員（教授）として招かれ、以後、仏教学部における美術史教育と研究活動の中心的役割を担ってこられました。とくに前職の根津美術館において数多くの実物資料に接することから得た豊富な知見と、本来のご専門であるインド・ガンダーラ美術から日本美術に至るまでの守備範囲の広さは、美術史研究者としての安田先生の特色と言えるものです。美術に対して体験的かつ幅広い知識をもって理解するところからもたらされた懐の深さは、それぞれの講義においても説得力の源泉となって、学生を集中させる力となっておりました。そして奉職されて間もなく、安田先生は仏教学部において唯一無二

の重要な存在となりました。

法華経文化研究所においては、平成二八年に所長に就任されて以降、安田先生ならではの活動を進めてこられました。とくに平成二六年から始められたウズベキスタンにおける仏教遺跡の学術調査は、その後に大学主体のプロジェクトとなりましたが、安田先生が法華経文化研究所の所員として各方面に働きかけたことを端緒として広がっていったものです。さらに平成二九年度、当事業におけるそれまでの活動が評価を得て、文部科学省の私立大学研究ブランディング事業として採択され、より多角的な事業展開が期待される取り組みとなっていきました。責任主体は研究所から学部そして大学へと移行しましたが、当初から今に至るまでの間、先生は学術調査隊の隊長として当事業を率いてこられました。

上記の取り組みは、仏教伝播の道筋に沿う中央アジアにおける歴史や文化の諸相解明に寄与する材料を提供しています。またその過程において、日本とウズベキスタン両国の考古学・歴史学・美術史学研究者の交流を進める媒体となっています。当プロジェクトの成果の詳細については、年度ごとに刊行された「調査報告書」に詳細が記されていますので、ここでは省略させていただきます。

先生の足跡のすべてをここに記すことができないのは残念ですが、仏教学部ならびに法華経文化研究所において安田先生が為された貢献は、教育や研究推進の点ばかりではありません。会議など議論の場面で発言されるときの軸のぶれない姿勢の中に、先生の良識と信条が溢れ出ていました。豊かな教養からもたらされた、事象に対する透徹した批判眼は、慣例や易きに流れがちな会議の場を引き締め、健全な議論ができる環境を保つためのスパイスとして機能していました。先生ご自身は冗談めかして無頼派を自認しておられましたが、その流されない眼差しが、私たちの中のいわゆる常識を隠れ蓑にするような弱さを照らし出しました。

そのおかげで、議論の場を健全に保つことができたのです。

私自身、このスパイスに如何に助けられ、それに寄りかかってきたかという事実を、先生のご退任という現実を前にしてあらためて気づき、強く動揺しています。この現実を極力前向きに受けとめるためにも、安田先生が示してくださった精神に恥じないように、今後とも法華経文化研究所の一員として、また仏教学部の教員として、研究と教育活動に全人格をもって取り組んでまいる所存です。

最後になりましたが、安田先生にはこの後も学部および大学院の非常勤講師としてお世話になることになっております。今後もますますご壮健にて、本学の教育・研究にご助力をいただけましたなら幸いです。